



窓報  
同窓会

# 千南原

第8号

昭和56年5月10日発行  
編集・発行  
藤枝市天王町1丁目7-1  
静岡県立藤枝東高等学校  
同窓会事務局



同窓会長 松永 肇

## 同窓会活動半世紀に及ぶ

志太中・藤枝東高同窓会のみならず、大正十三年に開校したわれわれの母校も五十余年の歩みを通じて、地域の進学校、サッカーの名門校として着実に発展してきました。一方また卒業生によって組織されている同窓会も、昭和四年七月三十日に発足して以来五十余年の年月を経、現在約一万三千名近くの大きな組織に発展いたしました。これも同窓会各位の深いご理解と絶大な協力の賜物と感謝いたしております。ここに厚くお礼申し上げます。



藤枝東高現校舎正面

さてこの同窓会であり、発足当初は旧制中学校を卒業したばかりの若輩であったために、学校の多大な援助、協力のもとにその組織作りがなされたこととあります。役員も卒業生のなかから選ばれたものの、会長は学校長が当たるといふ変則的なものであり、そのため初代校長の錦



## 同窓会設立のころ

宮崎 作次

第一回生の卒業が迫った昭和四年二月、志太中（現藤枝東高）同窓会設立のための準備が始まりました。まず同窓会規定を作る準備から取りかかると、やがて三月一日、第一回卒業式の後に全員に諮って規定を可決し、ついで入会式委員選挙等を経て、ついで入会式が発会を完了。同窓会長には校長が当たるといふ条文があり、それは太平洋戦争後まで続けられた。第一回同窓会の総会は、昭和四年七月三十日に開かれた。私の記録したものであると、正会員四十二名、先生方は十七名が出席、数こそ少なかったものの盛況な総会であった。正門前で写真撮影、先生方は椅子に腰かけ、卒業生はその前に坐ったり、後方が立ったりで、蘇鉄越しに旧玄関が見える。その中に第二回生が三名、旧制高の白線帽で加わっている。先生方の多くはカンカン帽、校長外二名の私服姿も見られた。ちよと夏休みだったからだろうか。卒業生の服装はさまざま、大半は学生服、カンカン帽もいるし和服姿

## 同窓会員 一万三千名に

昭和四年に発足した志太中藤枝東高同窓会も昭和五十五年卒業生三百三十六名を迎え、総勢一万二千八百余名の会員に達した。志太中の卒業生二千余名、高校に上った卒業生は一万八千八百名であり、校名が現在の藤枝東高となった卒業生は九千九百九十一名である。



## 母校の校長を拝命して

学 校 長 曾 根 雄 一 (第十二回卒)

このたびの人事異動によりまして、母校の校長を拝命し、光栄に身の引き締る思いしております。前任者三浦校長の本校に捧げた情熱を受け継ぎ、微力ではありますが最善を尽くす覚悟でございます。卒業生の皆様方のご叱声とご指導をおねがいするものであります。母校と私の縁は志太中時代の昭和十年から五十年間生徒として大変お世話になり、昭和二十三年頃十八カ月程教師として奉職させていたこと、昭和二十六年に昭和二十六年より三年間、更に昭和四十二年より教頭として三年間、今回で四回目の奉職でございます。長い教員生活において四回も母校に奉職できる現実に身の幸せを感ずると共に、その責任の重大さを痛感するものであります。さて、前年度末の大学進学の結果、特に国立大学の進学は



## 同窓会活動の発展を

前校長 三浦 孝一

藤枝東高も同窓会設立以来半世紀を経過し、卒業生総数も本年度で、一万三千名近くになりました。これらの方々が国内のみならず、世界の各地に活躍し、本校の同窓会も益々の発展が期待されます。昨秋、ある高校長が、全国海外教育研究会の本県代表として海外視察をして帰国されました。その方が、次のような事を私に話してくれました。代表団一行が、ブラジルに赴いた際、サンパウロ領事館で、まだ少壮とも思える領事館員の奔走により、会う事をあきらめていた要人に、会う事もお会いできた。その方との雑談の中で本県の、しかも藤枝東高の出身者であり、お互に静岡県人であることがわかって、彼は、母校藤枝東高のことをなつかしうに語ってくれた。その校長は、全国の視察団の中にあつて、本面に目をかけてくれたと、早速電話をかけてきてくれた。私も、この話をうかがい、何か肩身の広くなるのを覚えました。同窓会名簿を編みますと幾多の先輩や、少壮の卒業生が各所で御活躍されている事を知ることが出来ます。戦前、戦中戦後にかかわらず、千南原の地で汗を流し、学ばれた方々が、それぞれに努力され奮闘されておられる事を想像するとき、私も教職員は、更に有為な若者の育成に力を尽し、同窓会の発展にも寄与したいと考えます。

## わが青春(母校の思い出)



平松 金一 (第三回卒)

昭和六年三月二日が私達第三回生の卒業式の日だった。その時の卒業生は八十六名(四年修了で旧制高校入学の五名を含む)でした。卒業から半世紀、生存者は四十名、有史以来の激動期に青春の若き血を流らせた我々。毎年の同窓会には亡なられたクラスメートの奥さん方も出席して下さる。有難いことだ。この五月二十四日には五十周年を記念して慰霊祭を兼ねての同期会を学校近くの向善寺で盛大に催す予定だ。



遠藤 完 (第二十八回卒)

私の青春を書かせて頂くには、パレールを抜きにしては書く事が出来ない。部屋には天井があり、その天井には畳が入っていた。ときどき三年生が寝ている事があつた。先生方もそれを見て見ぬふりをしていただろう。高校時代は、パレール部には伝統があり、昇のベスト四を常に占めていた。たまたま僕達は全国大会(天皇杯)に出場した。部員は十二人、三年生は二人、二年生は六人、一年生四人、熊本まで行き二回戦で敗退、熊本からドンコウで帰ってきた思い出がある。



竹島 清 (第十四回卒)

私たちの志太中時代は、入学から卒業までずっと戦時色に彩られていた。一年・五年の時に、それぞれ日中戦争、太平洋戦争が始まり、音楽の授業にも軍歌が流れ、必修教科として軍事教練が課せら

初代校長 錦織先生の業績紹介 「郷土の発展につくした人々」で志太中(藤枝東高)創立当初校舎をサッカースタジアムに築き、さらに藤枝をサッカースタジアムとして発展させた功労者、本校初代校長錦織兵三郎先生の業績を紹介した「サッカースタジアムを築いた人々」(下巻)に掲載されました。本校創設期の模様を知るのに恰好な書であるので紹介いたします。